

2024. 9. 29 (日) 使徒19:8~10

19:8 パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、人々を説得しようと努めた。

19:9 しかし、ある者たちが心を頑なにしてお聞き入れず、会衆の前でこの道のことを悪く言ったので、パウロは彼らから離れ、弟子たちも退かせて、毎日ティラノの講堂で論じた。

19:10 これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた。

<説教>

第3回伝道旅行中の使徒パウロはエペソに来ました。そこは以前、第1回伝道旅行中には、〈アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられた〉(16:6)のために立ち寄ることが許されなかった所でした。第2回伝道旅行中には訪れることが許され、会堂でユダヤ人たちと論じ合いました(18:19)。〈人々は、もっと長くどどまるように頼んだ〉(20)のですが、パウロは〈神のみこころなら、またあなたがたのところに戻って来ます〉と言って別れを告げ、エペソから船出し(21)ました。そんなパウロが〈神のみこころ〉によって再びエペソに来ました。

パウロはそこで主イエス・キリストを信じる十二人ほどの弟子たちに出会いました。彼らは〈ヨハネのバプテスマ〉は受けていましたが〈主イエスの名によるバプテスマ〉は受けておらず、〈聖霊〉を知らず、「聖霊のバプテスマ」は受けていませんでした。それでパウロは彼らに〈ヨハネのバプテスマ〉の意味を教え、バプテスマのヨハネが証言し差し示した主イエス・キリストについて教え、主イエスの福音を伝えました。その教えを聞いた彼らは〈主イエスの名によってバプテスマを受け〉ました。更に〈パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らの上に望み〉、彼らは聖霊を受けたのでした(19:1-7)。そのようにしてエペソでの本格的な福音宣教が始まりました。

〈パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、人々を説得しようと努め〉(19:8)ました。ユダヤ人の(ユダヤ教の)会堂があれば〈会堂に入って、ユダヤ人たちと論じ合〉(18:19)い、主イエス・キリストの福音を宣べ伝えるパウロの仕方はここでも変わりません。今度は〈三か月の間大胆に語〉ることができました。そしてここでは〈神の国について論じて、人々を説得しようと務めた〉と記されています。「使徒の働き」の最後の方では、ローマで、〈パウロは、神の国のことを証しし、モーセの律法と預言者たちの書からイエスについて彼らを説得しようと、朝から晩まで説明を続けた。〉(28:23)とあります。そして最後にも〈パウロは、まる二年間、自費で借りた家に住み、訪ねて来る人たちをみな迎えて、少しもはばかりことなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。〉(28:30-31)とあります。このように、〈神の国〉とは一言で言えば〈主イエス・キリスト〉のことだと言えます。パウロはエペソでも今までと同じように(またこれからも同じように)、主イエス・キリストについて教え、イエスを神の約束の救い主、メシア、キリストだと信じ受け入れるようにと人々を説得しようと努めたのです。私たちの罪のために十字架で死なれ、三日目によみがえられた主イエス・キリストを信じ、神から罪の赦しを受け、神の子として受け

入れていただき、主イエス・キリストにある復活のいのち、永遠のいのちを受け、永遠に神の御支配の中で、神とともに生きるようにと説得しようと努めたのです。かつてピリポもサマリアの人々に〈神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝え〉、彼らは信じて〈男も女もバプテスマを受けた〉(8:12)のでした。復活の主イエスご自身が、昇天の前に四十日にわたって使徒たちに現れて、〈神の国のことを語られ〉ました(1:3)。その中で彼らに〈聖霊によるバプテスマ〉をお授けになる約束をしてくださいました(1:5)。イエス・キリストを差し示したバプテスマのヨハネが「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と宣べ伝えました(マタイ 3:2)。地上に来られて宣教を開始なさったイエスご自身がやはり「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言われました(同 4:17)。〈天の御国〉とは即ち〈神の国〉のことです。このように〈神の国〉は〈主イエス・キリスト〉とは切っても切れません。主イエス・キリスト抜きでは、主イエス・キリストを信じなければ、私たち人間は誰も〈神の国〉に入ることはできません。罪と悪魔の支配から解放されて神の御支配にを受ける幸いに与ることはできません。パウロはイエスを主キリストとして信じ、救われるように、熱心に心から〈人々を説得しようと務めた〉のです。〈私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした〉(I コリント 2:4)とパウロは言いましたが、エペソでもそれは同じでした。

さてしかし、そんな神の力、主イエス・キリスト、聖霊になおも逆らおうという人々がまたエペソにもいました(9)。〈ある者たち〉とはやはりユダヤ人たちが主だったと思われます。〈この道〉とは〈神の国〉、主イエス・キリストのことです。〈心を頑なにしてお聞き入れ〉ない、つまりどこまでも頑固で強情で主イエス・キリストを救い主として受け入れず、信じませんでした。しかもただ心頑なで、心の中で信じなかった、パウロのことばに耳を塞いだだけではありません。大胆にも〈会衆の前でこの道のことを悪く言った〉のです。あくまでも主イエス・キリストを信じないことを公に宣言したのです。言うなれば「公に不信仰告白をした」のです。主イエスの名によるバプテスマを拒み、聖霊のバプテスマを拒んだのです。そして〈会衆〉の中には主イエスを信じた(ばかりの)人、信じようと思っていた人、どうしようか迷っていた人もいたことでしょう。きっと親と一緒にいた子どもたちもいたかもしれません。そういう人たちにとって、この〈ある者たち〉の言動は「つまづき」以外の何ものでもありませんでした。パウロは〈弟子たち〉とともに〈彼らから離れ〉、彼らの会堂からも離れ、以後は〈毎日ティラノの講堂で〉神の国について論じ、主イエスの福音を宣べ伝えることになりました。〈ティラノ〉とは人名ですが、その講堂の持ち主か、講堂で教えていた人なのかは不明です。

ティラノの講堂での〈毎日〉の宣教、〈これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞〉(10)くこととなりました。かつて〈アジアでみことばを語ることを禁じなされた聖霊が今度はその道を開いてくださり、「語れ」とお命じになったのです。なお、〈主のことば〉とは〈この道のこと〉、〈神の国について〉と同じことになります。このアジアで主のことばを聞いた人々の中にも、「心を開いて信じる者」と「心頑なに信じない者」がもちろんいたことでしょう。しかしパウロは〈毎日〉〈主のことば〉を語り続けました。そして間違いなく、パウロのほか〈弟子たち〉もそれぞれ遣わされて行って〈主のことば〉を語り、証したことでしょう。例えばコロサイの教会は忠実な〈エパfras〉から福音を学んだとパウロは後に言います(コロサイ 1:7-8)。

また、「ヨハネの黙示録」にエペソを筆頭とする〈七つの教会〉のことが書かれています。それらの教会もこの〈二年〉の間の頃にそれぞれ始められたと考えられています。エペソの教会についてパウロは後に「私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがた一人ひとりを訓戒し続けてきた」と振り返ります(20:31)。

私たちが聖霊に導かれて〈毎日〉〈主のことば〉を聞き、学び、そして語る者とされるように。私たちが語る〈主のことば〉を聞いて心開いて信じる人が起こされるように。またその人が更に他の人に〈主のことば〉を語り、〈主のことば〉が聞かれ、信じられるように。そうやって〈神の国〉が前進して行くように心から願い祈ります。